

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 前期課程	修了年度	2023 年度
氏名	鷹尾伏 陸	指導教員 (主査)	奈良 雅之 教授

論文題目	大学生のスマホ依存, コミュニケーション量と孤独感に関する調査研究
------	-----------------------------------

本文概要

【問題・目的】 スマートフォン (スマホ) は情報伝達が容易であるが, 多用することにより対面でのコミュニケーションを減少させ, 使用者の孤独感を高める可能性がある。大道他 (2020) は, 社会的スキル得点の低さが孤独感を高める傾向にあり, スマホ依存度が高い群で顕著になると述べている。これに対して, 五十嵐・吉田 (2003) は, 大学新入生の入学後友人へのメール送信数が孤独感を低下させること, 緒方他 (2006) は, 友人との携帯メール使用回数が孤独感を低減させることを指摘している。本研究では, 大学生を対象として, スマホの依存や社会的スキルが, 対面, 非対面のコミュニケーション人数 (以下媒介変数) を介して孤独感にどのように関係するのかを明らかにすることを目的に質問紙調査を実施した。

【方法】 研究対象者は男性 36 名, 女性 112 名, その他 2 名である。平均年齢 19.6 才 (SD=±1.1) であった。使用尺度はスマホ依存傾向を測定する Wakayama Smartphone Dependence Scale (WSDS) (21 項目 4 件法) 戸田他 (2015), 孤独感を測定する舩田他 (2012) の日本語版 UCLA 孤独感尺度第 3 版 (20 項目 4 件法), 社会的スキル測定する菊池 (2004) の KISS-18 (Kikuchi's Social Skill Scale) (18 項目 5 件法) とした。また, 対面, 非対面に分けて最近一週間のコミュニケーションを取った人数も調査した。分析方法は, 3 つの使用尺度で探索的因子分析を行いスマホ依存の各因子と社会的スキルの各因子を独立変数, 対面, 非対面のコミュニケーション人数を媒介変数として, 従属変数である孤独感の影響を検討した。

【結果・考察】 日本語版 UCLA, KISS18, WSDS で探索的因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った。日本語版 UCLA の各因子名は, 因子 1 ($\alpha=.88$) 「寂しさ」, 因子 2 ($\alpha=.79$) 「孤独感」, 因子 3 ($\alpha=.73$) 「内気」と名付けた。KISS18 の各因子名は, 因子 1 ($\alpha=.86$) 「対処」, 因子 2 ($\alpha=.80$) 「会話力」, 因子 3 ($\alpha=.71$) 「処理」, 因子 4 ($\alpha=.49$) 「柔軟」と名付けた。WSDS の各因子名は, 因子 1 ($\alpha=.85$) 「スマホ熱中」, 因子 2 ($\alpha=.78$) 「ながらスマホ」と名付けた。独立変数のスマホ依存の因子を媒介分析で用いた変数はスピアマンの順位相関で有意性があつたスマホ熱中因子のみで, 社会的スキルの因子は因子分析をして明らかになった因子のうち内的整合性, スピアマンの順位相関で有意性のあつたものをすべて使用した。結果は, 対面コミュニケーションを介したとき孤独感は低下し, 介しなかったときは孤独感が増加した。非対面コミュニケーションを介したときは, 結果に有意性がなかった。本研究で有意性がなかった原因に, 仮説設定が誤っていたものと考えられる。五十嵐・吉田 (2003) の研究では, コンピューター・メディア・コミュニケーションによる社会的ネットワークが孤独感の低減に有効でないという見解を述べているからである。独立変数の社会的スキルの因子は, 内的整合性がなかった柔軟因子以外を分析で使用した。結果は, 対面コミュニケーションを介したときと介しなかった時, すべての変数で負の影響があり孤独感を低下させることが分かった。非対面コミュニケーションを介したときは, 結果に有意性がなかった。今回の結果から, スマホ依存で孤独感は増加することが明らかになった。しかし, 対面コミュニケーション人数を介すると, 孤独感を低下させることが明らかになった。スマホに依存していても, 人と対面でコミュニケーションを取ると孤独感を低下させることに役立つことがわかった。